

## 原爆（投下）賛美から原発（核の平和利用）肯定へ

——『科学者の社会的責任』についての覚え書・『思想を織る』・『聞かれるままに』・『焦土の記憶』を読む

天野恵一

唐木順三の『科学者の社会的責任』についての覚え書が、今年になって「ちくま学芸文庫」に収められ、再刊された。

そこで、「最悪の事態をなぜ防げなかったのか」と大きく帯に書かれたその文庫でそれを再読してみた。この一九八〇年に出版された唐木の未完の遺稿は、私にとっても思い出深い書物である。読みなおしてみても、それは今日の事態への鋭い警告の書であったことを、あらためて強く実感した。近代の科学技術の発展、とくに科学の進歩を無条件に善とする発想に立ち、その戦争などへの悪用のみを批判する、科学の外から「科学者の社会的責任」を問う論理に對置された唐木の、科学そのものに内在する罪を問いなおそうとする倫理的な姿勢（言葉）は、今日、とてもリアルで切実な響きを発している。

解説は宗教学者の島菌進によって書かれている（人間顔を持った科学へ）。この周到な解説のなかで島菌は、「ここで問うていたのだから。さらに八二年「反核フィーバー」へ向かう流れのなかで、この唐木の遺稿は話題となり、武谷は強い反論を展開し続け（『科学者の社会的責任——核兵器に関して』勁草書房、一九八二年参照）、なんと武谷は、その時点でもまったく反省などしておらず、自分の主張は正当であり続けているという「びっくり仰天」する論理を繰り返したのであるのだから。唐木の、この本は左翼の代表的物理学者、かつて原爆投下賛美の延長線上で「原子力の平和利用」の賛美を続けた武谷の、驚くべき科学性善説（近代科学信仰）の根強さをあらためてハッキリと引きずり出すという役割を担ったのである。この事こそが今、語られなければならない。私はそう思う。

私は八二年ごろの唐木への武谷のハチャメチャな反論への批判を、その当時書いた。そして一九九八年に、なんとこの武谷の主張を支持する、自称反核知識人たちを一括して批判する文章をも書いた（『正義の戦争』と反戦——被害者意識と加害者意識』『反戦運動の思想』論創社、一九九八年所収）。私は、この段階でやっと見えてきた、原爆投下を正当化する政治神話（イデオロギ）がアメリカの「国民」向けにだけでなく、日本の民衆にもかけても強力に組織されてきた事実の（共産党の「解放軍」規定の持った毒の）もつ重い意味に

以下のように論じている。「日本での楽天的な科学者の代表として弁証法的唯物論の立場に立つ物理学者、武谷三男があげられている。武谷は一九五四年のビキニ核実験までは自由な科学こそが人類の幸福に直結すると考え、ファシズムを倒す力になったとして原爆投下を肯定しさえしていた。ビキニ核実験以後、武谷は次第に立場を変え、本書が書かれる頃には反原発の有力な論客になっていた。だが、唐木が取り上げているのは戦後早い時期の武谷の言説である」。

私は、こういった表面的な武谷技術論評価には、まったく同意できない。いや、この説明の部分は、この唐木の本の「解説」としては妥当性を欠くと思う。なぜなら、確かに唐木が紹介した原爆投下の「肯定」論文は一九四六年に書かれたものである。しかし唐木は「原子爆弾は日本の野蛮に対する青天の霹靂であった」「日本の科学者はかかる野蛮に対して追撃戦を行うべきことに責任ある地位にある」と書いています。

——武谷のような人物は、占領（アメリカ）軍の検閲を、さしたる「言論の制約」とは感じなかったであろう。あらかじめ検閲して方向づけようとしたものと思いがかりになり一体化してしまっていたのだから。／GHQは占領期に、原爆の被害が明らかにならないよう隠し続けるべく検閲し続けただけでなく、「原爆は、文明に対する警告であり、日本人を平和に目ざめさせるものであった」という、原爆投下を正当化する自分たちの政治宣伝を、日本の言論や映像の中に、たくみにこむべく策動したのである（外から検閲とはわからない検閲体制をつくって）。武谷のような主張は、GHQの政治宣伝の内容とほぼ同一のものであったのである。／〈占領民主主義〉のつくりだした〈正義の原爆〉の神話は「きのこ雲の下」につくりだされた現実が時間とともにクッキリと露出された日本においては、アメリカでのように、強力な政治神話として組織され生き残るということは、まるでなかった。しかも〈占領民主主義〉の〈原爆民主主義〉という性格をふまえて、アメリカ（西欧）の民主主義の「正義」を正面から問いなおす運動が、キチンと歴史的に蓄積されてくることもなかったのだ。これは被爆者たちがアメリカ政府に補償を要求するという、あたりまえの運動すら今日にいたるまでつくり出

されてこなかったことに象徴されている。／アメリカ民主主義の「正義の戦争」論に、ファシズム侵略国家の民衆は沈黙せざるをえなかったのだ。――

この時、私は〈占領民主主義〉下の原爆（核）肯定状況の支配（体制に批判的であるはずの左翼をも包み込んだそれ）の持つ毒の意味について、それなりに気づいてはいた。しかし、それはまだまだ突っこみの浅いものであったと、今思う。

アメリカの原爆投下に肯定的であった意識は冷戦構造の成立へ向かう動きのなかで、ソ連（などの社会主義）の核を肯定する思想へと横スベリし、核の「平和利用」（原発）を原理的に肯定する論理へとめりこんでいく。こうした戦後左翼の恐るべきマイナスをトータルに批判的に検証する作業こそが、より歴史的な具体性をふまえて、果たされなければならなかったはずだ。私のこの文章は、そうしたことをスタートさせるバネにはならなかった。武谷技術論は、左翼の科学技術論としてはシンボリックな存在であり、その思想史的検証は重要な課題であったはずであるのに（武谷は核エネルギーの平和利用論者であり、自分の原子力研究者としての一生を誇りを持ちつづけた人物ではあるが、国や資本の危険な原発政策や公害政策に反対し続けた人物でもあったのだ。しかし、この人の科学・技術観は、一生ほぼ不変であった）。

という計算で、後に、広島の結果と比べると大体合っており、た」（傍点引用者）。

彼は核開発の専門家であったから、一般の人びとと違って、あのすさまじい被害は十分に予想できたというわけである。それなのに、あの発言かね。唐木の批判を意識したくだけは、こうである。

「宗教家のなかには、科学者に勝手なことをやらせると原子爆弾をつくる、だから宗教が必要だというようなことを言うような人がいる。だけど僕にいわせると、科学者はいわば使われていたんですよ。国民を鼓舞したということ、非常に少ないんですよ。そういう人もいるにはいたけど、どちらかというに使われていた。／ところが、哲学者とか、宗教家とか、芸術家というのは、率先してこの戦争は聖戦であるというふうにしてやっていたんですよ。哲学でも、西田幾太郎が一番、俺は知らんよという態度でした。とね。ところがお弟子の高山岩男など『世界史の哲学』とかを書いて僕は戦時中から快からず思っていたんですよ、もう便乗してね。便乗とは一体何だ。みずから身を挺して、特攻隊みたいにして死んでいくというんなら、まだ話は別だけど、便乗して、いわば特攻的なふるまいをした、これは許せない。／戦争協力にも二通り考えなきゃいかん。つまり戦争協力を自分だけで勝手にとなえる分にはまだ許せる。それを大々的に鼓吹するんじゃないければ、まだ許せる。

私は、この武谷の思想的自伝ともいえるべき書物をいそいで読んでみた。

一冊は『思想を織る』（朝日新聞社、一九八五年）である。ここでは戦中、原爆づくりのグループの一員である物理学者であったことは、彼の自慢話のネタであるにすぎない。特高警察に引っぱられた時の話として、こう述べている。

「僕は京都でつかまったときも、いま湯川理論という大変に重要な研究をしていることを、もう留置場の看守から何から、同房の者にも、わざとしゃべった。それと同じ作戦で、二度目につかまったときにも、自分は大変重要な軍の研究をやっているということを、もう誰かれなしにしゃべったんですよ。だからみんな同情してくれましてね。仁科研究室からは、たとえば渡辺慧君なんか、わざわざ軍帽、国民服姿であらわれたんですよ。そして、重要な研究について武谷氏に聞きたいから、みんなちよつと出てくれ、これは秘密の研究だから、とか何とかもったいぶっていた。それで、彼に熱拡散の研究の報告書を持っていたりしたことがある。／それから、つかまっている間に、もし原爆が落ちたら、一体どれぐらいの被害が起るかという計算をしたんですよ。そして、ちょうど中都市一つぐらいすつ飛ぶぐらいの威力があるということがわかりました。ウラン二三五が臨界量を超えた場合に、大体この程度の連鎖反応が起こって、この程度の規模の町がやられる

しかし、そういう立場に便乗して、あいつは戦争非協力だ、こいつはけしからんというふう、あげつらっていたやつは許せないというのが僕の考えです」。

戦争中、権力によって弾圧された武谷のこういう主張は、理解できないわけではない。しかし原爆のための科学・技術（者）は本来、責任など問われないニュートラルな存在であり、悪用した奴らが悪いだけだという都合のいい論理（心情）で被害者意識のみで戦中をくぐり戦後を出発した武谷。彼が原爆投下を賛美し、核研究の再開をいち早く主張し、原子力（核）エネルギーの「平和利用」（原発づくり）の夢をまきちらす発言を繰り返したのは、アメリカにしがみついた日本の国家と資本の動きへの許されない「便乗」だったとはいえないのか。

北沢恒彦を聞き手とするインタビュースタイルの、もう一冊の自伝（聞かれるままに）『思想の科学社、一九八六年』のほうでは、唐木発言について、以下のように具体的に論じている。

「だからね、唐木順三的な、原子爆弾を生むような物理学なんかやめちゃえ、そういうことをやる物理学者なんか悪の権化だから、みな殺しちゃえ、殺しちゃえとは書かなければいけません、まあ結局は殺しちゃえということになりますよ。それで、殺しちゃったら、原子爆弾は無くなるかといったら、そうはいかないですね」。

「そうです。だからやっぱりね、原子爆弾というのは、社会がつくりだしたもののなんですよ。さきほどの、落ちるべくして落ちた結果」というのではなく、リンゴの木をその目的でゆすったということなのです。社会がつくりだしたものであって、そこには科学的成果というものが利用されたということなんです。技術ですからね、原子爆弾というのには」（傍点引用者）。

原子爆弾を、反ファシズムの正義感かられてつくりだすことに加担してしまったインシュタインらの強烈な罪の意識を紹介しながら、「科学者の社会的責任」を静かに問うた、唐木をひたすら反科学主義者（科学の全否定者）のイメージにぬりたくった、この武谷の異論は、自身がひたすらなる科学性善説の信者であることを示しているにすぎない。科学・技術なるものを国家・社会・資本のまったくの外部にあるものとして、純粹に自己増殖する価値のごとく位置づけているのは自分のほうなのだ。

二冊を読んでみて、敗戦直後、徳田球一がトップの共産党のイデオログとして、原爆エネルギー賛美を奏で続けた時代、そしてバラ色の核の「平和利用」賛美をプロパガンダし続けた物理学者としての自分の歴史について、かなり自覚的に省略している事実<sup>1</sup>に気づいた。この「省略」に、それなりの反省は読めなくはないが、「世界文化」で弾圧されたりベラルな唯物論者（物理学者）というイメージで

のみ生涯が語られすぎている。そして自分の科学・技術観への根本的な反省のメスは、少しも入っていない。その点

は、この唐木への非難の言葉が象徴しているといえよう。

最後に、福岡良明の『焦土の記憶 沖繩・広島・長崎に映る戦後』（新曜社、二〇一一年）を紹介しよう。

私はこの本で、広島、長崎の戦後が、平和を導いた解放の原爆投下というイメージで出発しているという、驚くべき具体的事実を知らされた。

「被曝」というと、筆舌に尽くせぬ悲惨さが連想されよう。

だが、終戦直後の広島では、それはしばしば明るさをもつて語られた。／一九四六年八月五日から七日にかけて開かれた広島平和復興祭では、ブラスバンドや花電車、山車<sup>だ</sup>が市内を巡回し、園芸大会が催された。翌年八月六日の平和祭でも、『広島中心部新天地の娘さんたち七十余名』が『あでやかな衣しように花がさをかざ』し、『ピカッと光った原子のたまのヨイヤサー、飛んで上がった平和の鳩の上』（平和音頭）の囃子に合わせて、銀座通りを練り歩いた。山車や仮装行列も練り出されたほか、商店街は『平和ちようちん』を下げ、福引き付きの『平和大売出し』を行った。『中国新聞』（一九四七年八月六日）では、『至るところで盆踊りが行われ休みどころが徹夜で踊りまくろうと思ま』く人々の姿が奉じられていた。前日や同日の『中国新聞』『夕刊ひろしま』（中国新聞社発行の夕刊紙）には、

『祝 平和祭』を大きく掲げた企業広告も掲載されており、平和祭は前年以上に盛り上がった。

長崎のほうはこうである。

「終戦直後の長崎でも、原爆被災日は祝祭性を帯びていた。一九四七年八月九日には、本大工町の市民運動場で平和盆踊り大会（長崎市連合青年団主催・長崎民友新聞社後援）や花火打上げが行われ、三万人の人数でにぎわった。翌年八月九日の復興祭でも、夜には『文化の夕』が催され『ひぐら会の舞踏』などが行われた。／とはいえ、これらに対する長崎市民の不満も見られた。だが、それは『お祭り騒ぎ』を批判するものではない。むしろ、同時期の広島でのイベントに比べて小規模であることを嘆くものであった」。

地方のメディア（文学の同人誌などの諸雑誌や地方新聞）を詳細に調べあげ、発言者をこまかく「世代」わけしつつ、戦争（核）被害の実態が具体的に明らかにされ、戦争責任をめぐる問題が提起されてくるプロセスを、広島・長崎・沖繩という各地方の固有の性格をキチンとふまえて、その地域の性格に規定されたよじれた構造を明快に整理してみせた力作。これを読んで、私は原水禁運動がうまれた後の時間のイメージで、それ以前の広島・長崎を遡及的にイメージすることですますという、自分の安易な方法が生みだした誤認を、強く自覚させられた。

一九四六年の武谷の原爆賛美論文を、私は左翼の代表的イデオログ（物理学者）の突出した愚論だとばかり考えていた。しかし、それは誤っていた。あの論文は、〈占領民主主義〉の時代精神そのものであったのだ。だからこそ、大問題なのである。

（あまの やすかず／本誌編集委員）